

5代目の決意

北海道名寄産業高等学校 酪農科学科 3年 荒瀬 愛斗

私の家は、北海道北部の西海岸に位置する小さな町、天塩町で酪農業を営んでいます。人口約3100人、シジミ漁が盛んでヤマトシジミの漁獲高は北海道1位である一次産業の町です。北海道遺産の大河、天塩川の河口に位置し、豊かな水資源と肥沃な土地に恵まれたこの土地で、古くから酪農業で生計を立てていた我が家は現在父が4代目として、家族5人での経営を行っており、私は、その荒瀬牧場の5代目となることを目標に、現在、名寄産業高校酪農科学科で酪農経営や飼育管理の基礎、飼料などについて学習をしています。

天塩町の農業就業人口は町内の全人口の22%であり、年々減少しています。産業別産出額の51%が農業であることから、就業人口の減少は、今後の町の発展にも大きく影響していくと考えられます。

私は幼い頃から酪農業が大好きで、この地で家業を継ぐことに迷いはありません。離農する酪農家が町内でも後を絶えない現状の中で、私は自分が経営を継ぐことで、荒瀬牧場を守り、天塩町の経済も守っていかなければならないと考えています。

私は昔から牛やトラクターや農作業機にとっても興味があり、いつも両親にくっついて歩いていました。牧草時期に忙しそうな父の姿や、働きながら家事をして、私たち兄弟の面倒を見てくれる母の姿を見て、幼心ながら、「自分にできることはないだろうか。」と考えるようになりました。小学生の頃の仕事は、育成牛の除糞をすることでした。寝わらを敷いて作業が終わったときの疲労感と達成感、そんな酪農ができる毎日は充実しており、楽しい毎日だと感じていました。

「お前は家を継ぎたいか？」

中学生になったある日、父が私に聞いてきました。仕事をしている両親の姿に憧れ、両親の支えになりたいと考えていた私は、即座に「うん!」と答えました。返事をした後の父の笑顔はとてもうれしそうに見え、その笑顔を裏切ることのないように、父が安心して経営を任せられるように、自分が5代目の経営者として、しっかりしなければならないと強く感じました。そして、このときから家を継ぐために決意と意志を持って酪農について考えるようになったのです。それからの私は、酪農を一生の仕事にできる喜びから、以前よりも仕事を覚えることに積極的になり、現在では、搾乳作業や牧草収穫の機械作業も一通りの仕事はできるようになりました。

現在は酪農業を継ぐにあたり、今の経営を守り、さらに発展させるためにはどうすればよいか、経営課題と向き合う日々が続いています。我が家の現在の経営は育成牛62頭、経産牛85頭、飼料はラップサイレージ、乾燥ロール、バンカーサイレージ、デントコーン

サイレージ、配合飼料を牛の状況を判断しながら与えています。しかし、乳質や乳量は平均的で、決して、優良であるとは言いがたい経営状況です。酪農は、畑作りから牧草の栽培、冬期間の飼料の保存、家畜の飼養、繁殖、搾乳作業など、とても多岐にわたっており、自分の得意分野を持ちつつも、マルチにこなす能力が不可欠だと考えるようになりました。だから、シンプルな経営の基本をしっかりとマスターして実践することが必要であると考えます。

まず私が5代目として実現したいことは、乳質と乳量の向上です。特に乳質、乳量の向上に直結する飼料の質について、大きな課題だと考えています。現在は、デントコーンサイレージは近隣の酪農家と共同で畑を使い飼料を作っていますが、寒さなどの地域性もあり、デントコーンの栄養価はあまり高くありません。また、牧草についても、草地の更新が満足にできておらず、目先の収量をどうしても追わざるを得ないことから、肥料の増減で収量を上げようとしています。しかし、家族経営で行っていると、飼料の栽培と配合がどうしても労働負担につながり、その負担が多いことが良質な飼料生産につながっていないのではないかと私は考えます。

そこで、私は、その飼料の質の向上という課題を解決するため、来年手塩町に立ち上がるTMRセンターを利用して、良質な飼料給餌を目指します。労働負担の軽減ができるのはもちろんですが、何よりも、安定的に高栄養の飼料を給餌できることのメリットが大きいと考えています。現在は、センターを立ち上げるため借金がでていますが、少しずつ返し、取り戻せるような飼料生産を地域一体で実践していきます。

そして、5代目として実現したいことの2つ目は、経営規模の拡大です。TMRセンターを利用し、乳質と乳量の向上が実現すれば、収入も増加し、さらに労働負担が軽減されます。この労働負担の軽減が実現した際には、搾乳牛を約100頭まで増やしていきたいと親とも話しています。TMRセンター利用により必要なくなるスチールサイロは三年後には、取り壊す予定を立てています。その場所を利用して、新たに牛舎の増築を行い、現在よりも規模の拡大を目指します。

そして、3つ目に実現したいことは、新規就農者、農業研修生の積極的な受け入れです。私は、幸い酪農家の長男として、酪農を継ぐことができる環境にいました。しかし、本州から来ている私の友人など、酪農をしたくてもできない人たちがたくさんいることを高校で知ったのです。私の家で研修をしてもらうことで、酪農のやりがいや楽しさを知ってもらうことができれば、新規就農者の確保にもつながり、酪農業の衰退を食い止めることができるのではないかと考えます。また、私は民泊などで、子供たちを積極的に受け入れたいと考えています。教育ファームの認可を取得し、体験型の酪農を取り入れたいと考えています。二泊三日の酪農体験をベースに、豊かな自然環境の中で牛とふれあい、時には

つらい仕事を経験する。私が幼い頃体験した、この充実感と達成感を多くの子供たちに体験してもらうことで、酪農理解者の育成と、酪農経営者の育成に必ず貢献できると信じています。

昨年、我が家は分娩後の牛を低カルシウム血症や第4胃変異の影響で8頭も亡くしてしまいました。今まで、何十年も経営してきて、1年間にこんなに親牛を亡くしたことは両親も初めての経験だったそうで、驚きと同時に、私はマニュアル通りではいけない酪農業の難しさを改めて実感しました。酪農は難しく、日々学習です。しかし、4代続いてきた荒瀬牧場を守り、日本の酪農業を守っていくためにも、私は、荒瀬牧場の5代目として、強い決意と高い目標を持ち、天塩の地に根付いた経営を行っていきます。必ず夢を実現させ、次世代、その次、と魅力ある仕事として酪農をとらえてもらえるような経営を行い、天塩の地に荒瀬牧場ありと認めてもらえるような酪農家になります。

「お前は家を継ぎたいか？」

父となった私が、子どもに自信を持ってそう聞ける5代目になることを目指して。